

TNC  
通信

2020  
8月号



「大衡・万葉の森一蓮の花」  
みやぎ観光復興支援センター・ブログから

## 私の友好記憶 「出会い・縁…」 ② “上海の留学生時代に” 横山弥生

1985年の春休み、上海外語学院(現上海外国語大学)に短期留学をしました。学校は魯迅の墓所がある虹口公園のすぐ近くです。今でも頭に残っているのは上海の街路樹と黄色い街路灯、そしてけたたましいクラクションの音です。

祖父母と父達親子が滞在していた嘉興にどうしても行ってみたかったのですが、当時の嘉興は未開放地区で外国人の訪問は許されませんでした。同じ宿舎にいた日本人留学生に告げると、「知り合いが嘉興に行くと言っていたから、聞いてあげる」と返事。そしてその方の友人の中国人と一緒に、こっそり嘉興に行くことになりました。

日本人だと知られないように、中国製のジャンパーを借り、列車の中では一言もしゃべらないで、と言われ、多分2、3時間列車に揺られて嘉興に降りました。父から「春波橋という橋の近くだった。子供の頃、また来るだろうと思っていたから、建物の近くにおもちゃを埋めてきた」という話を聞いていました。駅から舗装もしていない道路を歩き、中国人は道行く人に春波橋を尋ねてくれました。そしてついに橋が見つかったのです。5mくらいしかない石橋だったと記憶しています。

老人に戦時中の会社の事を尋ねてくれたのですが、詳しいことを知っている人には会えませんでした。もちろん父が埋めたというおもちゃも探せませんでした。40年前に、ここで暮らしていた祖父母や父達親子の生活に思いをはせました。一人の日本人のわがままに付き合っ



魯迅の墓と像がある虹口公園

て下さった中国人には感謝の言葉しかありません。上海での出会いや出来事は私にもっと中国を知りたいという思いを残したのです。

夏、淡紅色や白色の花を清らかに咲かす蓮。周恩来総理の祖先と言われる周敦頤は「蓮は華の君子なる者なり」「蓮の淤泥より生じて染まらず」(『愛蓮説』)と記している。泥中に根を張り見事な美を届けることから、困難の中にあっても強く輝く生き方に例えられる。

1950年10月、「日中友好協会」が発足した。今年70周年を迎える。過日、あるコラムに中国側の「中日友好協会」が1963年秋に発足。この時、植物学者の大賀一郎博士が就任した郭沫若名誉会長に「大賀ハス」の実を贈り、北京や杭州など10か所で植栽された。その後、大賀ハスは中国古代蓮と交配され「中日友誼蓮」と名付けられた新品種が誕生し、66年にその種が日本に届けられた、という。そして大賀博士の信念は「蓮は平和の象徴なり」であったと、まとめていた。

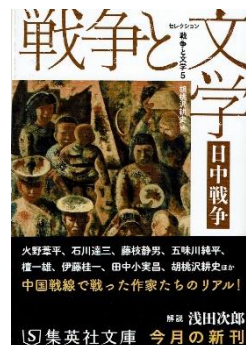
ウイズコロナ、また東アジア等、緊張した難しい時代ではあるが、希望と平和の花を咲かせていく民間活動でありたいと思う。

### 「友好手帳」の申し込みを！！

2021年用。黒・赤の2種類ともに800円で。申し込みは横山事務局長迄お願いいたします。

### 『戦争と文学5—日中戦争』

(胡桃沢耕史他著、集英社文庫1870円)



日中戦争の開始は1937年7月の盧溝橋事件とされる。本書は文庫として改めて全8巻が出版された中の一巻。中国戦線におもむいた作家18名が描いたリアルな小説である。胡桃沢耕史氏の「東干」が冒頭の長編であり、石川達三「五人の補充将校」、火野葦平「煙草と兵隊」、檀一雄「照る陽の庭」、五味川純平「不帰の暦」等、著名作家の作品である。太平洋戦争を描いた凄惨な作品と異なり、淡々とした筆致のなかに、むしろ戦争下の“人間”が赤裸々に綴られ心に残る。

「黄土の記憶」(伊藤桂一)、「脱出」(駒田信二)、「崔長英」(富士正晴)もぜひ、一読してほしい作品。解説の浅田次郎氏は「呉淞クリーク」(日比野士朗)を“戦闘そのものの実相をこれだけ丁寧、しかも冷静に描写した作品は珍しい”と推す。確かに戦時統制下での作家の作品は自由ではなく、従軍記の類も検閲が目を光らせていた時代である。表現の自由もない不幸な時代が再び来ない為にも、こうした作品に触れていきたいと感じた。(M)

「黄土の記憶」(伊藤桂一)、「脱出」(駒田信二)、「崔長英」(富士正晴)もぜひ、一読してほしい作品。解説の浅田次郎氏は「呉淞クリーク」(日比野士朗)を“戦闘そのものの実相をこれだけ丁寧、しかも冷静に描写した作品は珍しい”と推す。確かに戦時統制下での作家の作品は自由ではなく、従軍記の類も検閲が目を光らせていた時代である。表現の自由もない不幸な時代が再び来ない為にも、こうした作品に触れていきたいと感じた。(M)

shu ben